View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

2012年
11月16日
金曜日

Y・東京・人間

山田　仁　准教授（イギリス文学）

イタロ・カルヴィーノの小説『宿命の交わる城』が楽しそうに実践したタロットカードの恣意的な解読に触発されて、横尾忠則の写真集『東京Y字路』（国書刊行会　２００９）を繰る。始めも終わりもなく、次々に同じ造形が目に突き刺さる。Y。分岐する街路。Yによって貫通され引き裂かれる地面と建造物。大都会に刻まれたYの刻印集である。

写真集のタイトルを「Y」と「東京」に引き裂いてみる。何事も人生に置き換えて考える人なら、Yに人生の岐路をみるだろう。あるいはYは血管の分岐ではないだろうか。さらに猥褻を好む人ならYに大腿部の分岐を見出し、分岐路に挟まれた現象にエロチックな妄想を膨らませるかもしれない。Yが生命に近く身体性や肉体の暖かみを伴うのは、Y染色体を予感させるからかもしれない。Yは性の分岐と確定、あるいは男性の自己主張か。Yの必然性について考えてみる。十字路やT字路、一本道のIではなくなぜYか。いずれの字体も９０度乃至は１８０度に支配されていて効率的であり現代の都会にふさわしい。それに較べてYのなんと非効率なことか。鋭角的な二股に挟まれた家屋の内部は、おそらく部屋の一角が尖っていていびつな輪郭を呈しているに違いない。家具を置くわけにもいかず、いかにも非効率で空虚な空間を住人は持て余している筈である。また、大地を引き裂く形態としてYをみるならば、Yは暴力的でありグロテスクでさえある。拡散の起点としてYを想像してはどうか。二股に分岐した道が、限りなく分岐を重ねて高層ビル群の中に分け入り消尽する……。空間は無限に断片化され、区画はねずみ算式に拡散し増殖する。これは、ホルヘ・ルイス・ボルヘスの「八岐の園」を彷彿させる。さらに、十字路やT字路はその平凡さ故に日常に浸透していると考えるならば、Y字路は非日常を代表するかもしれない。非日常性を補強するのは、被写体としての人間の不在である。住民とその生活感が粘液のように糊着した街から、人間が排除される。日常がこびりついた空間に、瞬間的に非日常を現出する。

このように想像すると、東京であることの必然性も理解できる。田舎の道には、そもそも人間が不在であることが日常なのである。人間の充満する都心であるからこそ、人間の不在が非日常を喚起する。日本の、そして世界の首都としての東京。世界中の人、物、そして情報が集結し、機能性と効率性を極限にまで追求する東京にYが巣くう。ミクロ経済学の要諦は「最小の費用で最大の効果をあげること」（最適化行動）にあるらしいが、世界経済の中心を形成する東京で、Yが最大のコストから最小のベネフィットを抽出しているという現実をどう受け止めればよいのか……。

だが、これこそ人間ではないか。Yが刻印を残す大都会東京こそ人間なのである。Yは世界中にある。Yは人間の中にある。人間はYを忘れた。人間にはYが必要だ。■